学位論文題名

萬葉集における羈旅と文芸

学位論文内容の要旨

『萬葉集』には、「羈旅」の部立て・分類項目等のもとに収められた「羈旅歌」以外にも上代人の行旅の機会に詠まれた歌が多数収録されている。また、「羈旅歌」は部類的には雑歌に属するが、行旅に関わる歌は相聞・挽歌部にも存在する。「旅」という契機が文芸に及ぼした影響を考察するに際してはその全体を展望する必要がある。また、羈旅の歌は、内容的に旅先の土地への関心を歌うものと家郷への関心を歌うもの大きく二分することができ、その消長には時代的な展開の相が見られる。それゆえ、文芸の題材としての「羈旅」の展開過程を考察するに際しては、時代と部立ての二面から取り組む必要がある。本論文はかかる観点から広く行旅にかかわる作品を取り上げ、「羈旅の歌」の相のもとにそれらの作品の新しい読みの可能性を拓くとともに、柿本人麻呂の達成を基軸に、「羈旅の歌」の史的な展開、和歌表現の達成の軌跡を把握せんと試みたものである。その作品分析の中心的方法としては、作品の表現自体の徹底的な吟味をめざすが、「羈旅の歌」という対象の性質上、羈旅信仰とのかかわりを民俗学的な観点から検討する手法をも援用する。

『萬葉集』三大部立の中で最初に羈旅と関わる作品が現れるのは雑歌の部である。『萬葉集』第一期に見える羈旅詠の大半は行幸時の例であり、そこに個人としての感慨は見られない。羈旅における個人の感慨が最初に作品となったのは、謀反の罪で護送される旅中で詠まれた有間皇子の二首で、その第一首は松の枝を結び無事に帰還することをねがう歌であり、第二首は旅先の土地の神へ食物を供える儀礼を背景に家と旅とを対比的に捉えた歌である。この二首の個の抒情の獲得には罪人としての孤独な旅という状況が大きく働いており、ここに現地への讃美と家郷への思慕という羈旅の歌の重要な二要素を持つ歌が誕生した。

羈旅における個的抒情を詠む歌は、第二期歌人柿本人麻呂によって確立された。『萬葉集』で最初に「羈旅歌」と規定された作品も人麻呂の「羈旅の歌八首」である。ここには旅にある者が抱く思いの典型が示され、八首の冒頭と末尾に旅先の地を讃美する歌を置き、間の六首に現地に関わりつつ家の妻へと向かう心情が歌われる。その第四首には「旅行く我」という表現があるが、これは、家郷を思慕しつつ孤独な旅に行く自己を意識的に把握した表現として注目され、羈旅の持つ哀愁がひとつの発想類型として認識されるに至ったと認められる。

人麻呂によって開拓された羈旅の歌は、第三期に至って広がりを見せる。巻七雑歌部に収録される「羈旅作」九〇首は、平城京時代の羈旅詠の集合体であり、それぞれの地域の傾向性に違いが看取されるが、これは原資料の差異が反映された結果で、それは、作品の主題・関心が現地へと向かうか、家郷へと向かうかという視点に立つとき明瞭になる。『萬葉集』の第三期にはこの二つの要素が一般的に共有されるものとなったことが知られる。(以上、第一章)

雑歌と連動して、相聞においても羈旅をめぐる心情が取り上げられるに至る。第一期の相聞には旅

中の詠は見あたらないが、第二期に入ると、柿本人麻呂によって羈旅に関わつての妻との別離が歌われる。「石見相聞歌」がそれで、この作品には家郷の「見納め」と、家人と旅人の間で交される「袖振り」の習俗が描かれる。旅人と家人とが、呪術的な共感関係のもとに袖を振りその姿を互いに確認することが無事な帰還に繋がるのだが、ここでは「山」が遮って「袖振り」ができなかったことが歌われ、永遠の別離を歌うという主題を浮き彫りにすることに大きく与っている。

「山」を隔てての抒情は『萬葉集』第一期にも見えている。その中で、従来、行旅とは無縁とされる天智天皇の歌も「山」が大きな意義を持つ点で無視できない。鏡王女の家が山上にあれば引き続き見られるものを、と歌いかける天皇の歌は、旅立ちにおける感慨と見るときももっとも理解が届く。「石見相聞歌」が「山」を核として作品を構成しえたのも、こうした前代以来の伝統をふまえてのことであろう。

一方、女性の側にも羈旅に関わる相聞の歌が発生する。女性は家で旅人の帰りを待つ存在として歌われることが一般であるが、但馬皇女の作では、旅行く人を追う女性が仮想的に歌われる。皇女は旅立つ穂積皇子を追いかけてやうとする我が身を省み、皇子に対して自分が追いつけないように「標結へ」と懇願する。この歌の背後には、激しい恋情の末に行動する女性が破滅するという物語の型が想定される。

このように相聞の歌においても人麻呂の時代が一つの転機となって文芸の対象としての羈旅が形成された。これと関連して、「石見相聞歌」には「妻依羅娘子」の歌が続くが、これは「石見相聞歌」が享受される過程で生まれた作品と考えられる。(以上、第二章)

妻との関係において旅人を造形するという方法は、挽歌においても注目すべき作品群を生んだ。『萬葉集』挽歌部には、羈旅において落命した路傍の名もなき死者を歌う一群の歌がある。これら「行路死人歌」と呼ばれる作品には共通の発想が見られ、ある土地を通過する際に威力のある対象を歌う歌の型に属しており、その背後には異郷の神に対する信仰があったが、作品は信仰の枠組みを超えて死者への人間的共感を詠むという方向へと進んだ。人麻呂の「石中死人歌」は、前半では土地の景物を歌い荒ぶる神への配慮を示すが、路傍の死者を忌避すべき存在としては描かず、家郷と切り離された旅人として捉え、同情と共に造形している点に信仰からの飛躍が認められる。

路傍の死者への哀悼が家人との別離という面から発想される傾向は『萬葉集』後期の歌人田辺福麻呂の「足柄坂死人歌」にも見える。そこでは死者への人間的共感がさらに深められ、土地の神に対する畏怖よりも死人の生前への関心に重点が置かれる。

『萬葉集』は人麻呂自身も行き倒れの死を遂げたと伝える。それは人麻呂を敬慕する後代の人々の営為によって生成された虚構だが、信仰的・心理的には忌避すべきものであるはずの人の死が、この時代すでに文芸の対象となりえていたことが知られる。(以上、第三章)

かくして、羈旅という契機が文学的題材として把握されるに至ったことには、柿本人麻呂の営為が大きく作用していたことが明らかとなる。旅先の景物を歌う雑歌として出発した羈旅の歌は、柿本人麻呂によって相聞的発想を加えられて大きく発展し、羈旅が文芸上の主題として確立されるに至ったのである。(以上、終論)

なお本論文の構成の概略は以下のとおりである(各節・各項の題名は省略した)。

緒論		p 1
第一章 羈旅と雑歌		p 29
第二章 羈旅と相聞		p 107

第三章 羈旅と挽歌	p 218
終 論	p 319
初出一覧	p 330
参考文献一覧	p 332

(400字詰原稿用紙換算約590枚)

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 身 崎 壽
副 査 教 授 富 田 康 之
副 査 教 授 山 田 貞 三

学 位 論 文 題 名

萬葉集における羈旅と文芸

審査委員会は、本論文が提出されて以後、たびたび委員会を開催し、申請論文を慎重に精読・審査し、また長時間にわたる口述試験を実施して、十分に審議を重ねて適正な評価に努めた。その結果、以下に述べるような本論文の評価に鑑み、全員一致して、三田誠司氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達して、文学研究科教授会に報告した。研究科教授会はこの報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

本論文は、広く羈旅にかかわる『萬葉集』作品を取り上げて、その部立てと時代とに着目しつつ表現分析を行い、「羈旅の歌」の相のもとに、それらの作品の新しい読みの可能性を拓くとともに、第二期歌人柿本人麻呂の達成を基軸に、「羈旅の歌」の史的な展開、和歌表現の達成の軌跡を把握せんと試みたものである。

本論文で三田氏は、「羈旅歌」の部立てや題詞の記載等にこだわらず、広く行旅にかかわる作品を取り上げて論じている。ここに、従来の研究には見られなかった本論文の野心的な試みが看取される。だがそのことは必然的に、その作品を「羈旅の歌」として把握することが妥当か否か、またそれが個々の作品の新たな理解、解釈の深化につながりうるものかどうか、といった問題点をも本研究にもたらす結果となった。しかし、結論から言うなら、本論文はおおむねこうした問題点を克服している。またその結果として、本論文は個別の作品論としても多くの成果をあげていると評価することができる。「石見相聞歌」（第二章第一節）や「石中死人歌」（第三章第二節）における、羈旅信仰から自立した別離の抒情の確立に対する的確な分析、「足柄坂死人歌」（第三章第三節）における「行路死人歌」からの昇華の評価等がその典型的な例であり、これらはすでに学界において、当該分野の作品分析におけるもっとも先進的な研究として認められている。

一方、「羈旅の歌」の、呪術の歌・信仰の歌からの脱皮、その抒情の進展を、時代と部立てとの両面から検討するという視点も、従来の研究の枠組みにとらわれない新鮮なものとして表現史の新しい展望を実現した。その展開の中核を担ったのが柿本人麻呂であるとの指摘は、萬葉和歌史における人麻呂の位置を考えると当然のこととはいえ、十分に説得力を持つ。また、人麻呂以降、その影響のもと、「羈旅の歌」における相聞的、挽歌的な抒情表現がそれぞれにさらなる洗練を加えて行った軌跡が鮮やかにとらえられている。これも本論文が研究史に新たな局面をひらいたものと評価できる。

本論文では、後期萬葉の「羈旅の歌」を全面的に取り上げてその具体相を徹底的に分析するには至っていないが、すでにその端緒は田辺福麻呂の「足柄坂死人歌」の分析と評価において示されており、このような方法によって広く『萬葉集』の「羈旅の歌」を把握し、その展開過程を追うことで、萬葉時代における行旅の歌の歴史的な展開の相を把握することが可能になったといえる。

付け加えるなら、日本文学の伝統における「旅」という題材の重要性に鑑み、三田氏の採った方法と、その研究成果からの展望とは、ひとり『萬葉集』研究にとどまらず、日本文学史全体を貫通する分析の視点たりうるものだという事、論を俟たないであろう。審査委員会は本論文のこうした成果を高く評価したものである。